

■小磯先生による講話の概要について

- 1 演 題：北海道の経験を未来につなげるために～地域政策の歴史的文脈から～
- 2 講 師：一般社団法人地域研究工房 代表理事 小磯修二
- 3 主な内容：

【はじめに】

- ・150年事業の議論 長期の時間軸で見つめる、見つめ直すことの意義

- ・北海道の政策の重要なテーマについて長期の時間軸で見つめ直し、進めていくことが必要ではないか。
- ・北海道特有の政策というものを改めて考えながら、歴史的文脈、長期の視点で見つめ直していくことが未来に向けた政策課題に向き合うときには有効。
- ・北海道の政策史をきちんと残しておくことをお願いしたい。過去の営みを知る努力が大切。北海道命名150年を機会に長期の視点で北海道の伝統を振り返ることが大事。

【1 私と北海道】

- ・北海道の特性、魅力 地域総合開発計画の伝統
- ・国、自治体、民の連携プレーによる地域分析力 北海道経済白書を支えた政策集団
- ・地域政策の醍醐味

- ・北海道開発のプランニングの質の高さは全国モデルであった。150年間長期計画を継続してきている地域は世界的にも例がない。
- ・北海道開発局による地域間産業連関表の作成、道庁による全国初の北海道経済白書の発刊、北海道拓殖銀行による地域版マネーフローの作成など、国、自治体、民間による見事な三位一体による地域分析力の伝統ある地域。それによって質の高いプランニングが生まれてきた。
- ・100年で人口500万人、G R Pではヨーロッパの中堅国と肩を並べる地域をつくりあげたことは地域の誇り。

【2 外から見た北海道】

- ・経済協力活動の経験から
- ・北海道の発展と地域政策 長期計画、総合政策体制、財政調整制度
- ・台湾と北海道

- ・北海道の独自の拓殖制度は台湾でも展開された
- ・台湾統治の際に新渡戸稲造を招聘し、北海道の拓殖制度をモデルに実施。こうした歴史的な文脈の故に台湾の人は北海道に親近感を持つが、意外に北海道の人の方が知らない。

【3 50年で見えること】

- ・1968年とは 高度経済成長 国際化 公害問題 その後のオイルショック
- ・北方圏構想 地方発の独創的政策 からいも交流 環日本海圏構想へ
- ・苫東開発の意義 「破たん」か 先駆的な環境アセスメント 先行買収
- ・資源有限の意義 経済・生活・環境

- ・北方圏構想は北海道独自の海外展開政策。北海道の優位性、武器は北にあること。ヨーロッパ、アジア、アメリカと最短でつながっている。しかし、現在は北方圏の組織はなくなり、いつの間にか国際交流・国際協力と一般的な政策になってしまったのは残念。
- ・苫東は、日本の高度経済成長時代に発想された。経団連からの要請が契機。 オランダのユーロポートのモデルにもなっている。
- ・オイルショックを契機に資源は有限であるという認識に転換。
- ・公害問題もあり、世界で最も環境に向き合った工業団地である。日本初の環境アセスメント、30%の緑地は世界の工業団地に例がない。苫東内のつた森山林はそのままの環境を維持している。
- ・その時代背景を理解した上で評価することが大事・百年記念塔のコンセプトに「天をついて限りなく伸びる」という表現がある。当時はそういう心意気で政策を進めた。その後、有限性というものを認識された。一方で、夢への挑戦という意欲が次第に失われていく。
- ・冷静に50年前の政策理念を見つめ直す機会がないまま今日に至っていると感じる。

【4 時代を見つめる力】

- ・地方創生を超えて
- ・歴史的な文脈から地域政策を見る
- ・パラダイムの転換
- ・①民と官、②国と自治体、③大都市と地方（拡大している地域間格差）

- ・7月に「地方創生を超えて」というテーマで、北大の研究者と一緒に出版をするが、その中で私は歴史的な文脈の視点から地域政策を見つめ直した。
- ・今、着実に東京大都市圏と地方圏の格差は拡大してきている。さらに、北海道の中でも札幌圏と地方圏の格差は拡大し、いびつな地域構造になりつつある。地域政策の原点は地域間不均衡の是正であった。解決のヒントは歴史的な文脈の中にあると思う。